



## 卷頭言

### 最近の画像工学に思う

辻 内 順 平\*

画像工学という言葉がいつ頃から使われるようになったのかはよくわからないが、最近ではすっかり定着したように見える。古い話で恐縮だが、今から20数年前、当時の光学懇話会内に「画像工学研究グループ」を作り、同好の士が集まってこれを新しい光学の一つの分野にしようとあれこれ議論をしていた頃を思い出す。それが「画像工学コンファレンス」が発足したのを機会に、一応使命が終わったと解散したが、コンファレンスの方は共催団体も増え、毎年順調に歩みを続けて、既に22回を数えるに至った。

画像工学コンファレンスには歴代の実行委員長を構成員とする常置委員会があって、このコンファレンスの諮問機関となっているが、実はこの設置を提案したのが筆者であった。というのは、発足当時このような分野がいつまで研究者の関心を引くかに不安を感じ、このコンファレンスにいつでも幕を引くことができる用意をしておきたかったのである。もし、コンファレンスを閉じるときには、それは翌々年からとし、翌年は最終回を盛大にやって有終の美を飾ろうという筋書きであった。しかし、筆者の承知する限り、そのような議論がでたことは一度もなく、多少の糾余曲折はあったにしても、今日まで隆盛を保っているのはまことにご同慶のいたりである。最初の頃は、いつそのような話ができるかと、はらはらしながら毎回出席していたが、このごろはすっかり安心して、めったに出席しなくなってしまった。

2年ほど前から、画像工学の幅を広めて、関連分野を有機的に結ぶ試みをしようという発想が若い研究者の方々から起り、「新画像システム研究会」が応用物理学会の研究会として活動を始めた。20年にして第2世代の画像工学に発展したと考えてよからう。

画像工学科に在籍していると、受験生がどんなイメージをもっているのか気になり、面接の時に聞いてみると、TVとかCGとかにあこがれて来る人が多い。むかし、画像工学と言ったら「看板の研究でもやるんですか」という反応が返ってきた頃に比べると格段の進歩かも知れないが、やはりまだ本質が理解されていないような気がする。研究者の間では了解されている技術分野をわかりやすく一般に普及させることも、これからの大変な仕事の一つであろう。